

長崎県における病児保育の実態調査

—— 第1報 保護者に対する調査結果 ——

宮下 弘子¹・宮原 春美¹・川崎 千里²
板谷真理子³・詫摩 真弓⁴・竹田 恭子⁵
中村美寿乃⁶

要旨 長崎市内7カ所の保育園利用者を対象に病児保育に対する親の意識と実態を調査し、以下のことが明らかになった。

1. 子供の病気時の対応は、母親が仕事を休んで自宅で看護するものが最も多かった。
2. 両親の職業と子供の病気時の対応との関連では、両親が共に被雇用の場合、父母のいずれかまたは両方が自営の場合に比べて自宅で看護すると答えたものが有意に少なかった。
3. 「子供が病気の時くらい親が看るべき」という意見が圧倒的に多かった一方で、病児デイケア事業に賛成するものも半数以上みられた。

長崎大医療技短大紀 9: 39-41, 1995

Key words : 病児保育, 病児デイケアパイロット事業, 就労, 保育

I. 緒言

結婚や出産後も働き続けたいと考える女性にとって、産休後の乳幼児の保育をどうするかは切実な問題である。そのような背景から保育所の保育時間の設定や大幅な時間延長、また休日保育、病児保育、一時的保育等を求める声が急速に高まっている¹⁾。

今回、私たちはその中から病児保育に焦点をあて、働きながら育児をしている親が子供の病気時の対応をどのように考え、対処しているのか、また病児デイケアパイロット事業をふまえ、病児保育の望ましいあり方についてどのように考えているのか調査した。その結果に若干の考察を加え報告する。

II. 対象と方法

対象は長崎市内7カ所の保育園の利用者490名とし、質問紙によるアンケート調査を行なった。アンケート用紙は各保育園を通して配布、回収した。回答のあったものは322名で回収率は65.7%であった。調査期間は平成5年7月21日～8月24日であった。

III. 結果

1. 対象者の背景

対象の家族構成は、核家族世帯267名(83.1%)、三世代世帯54名(16.9%)であった。

なお、単親世帯が37名(11.5%)あった。

子供の年齢は、1歳児70名(21.8%)、2歳児72名(22.4%)、3歳児62名(19.3%)、4歳児45名(14.0%)、5歳児47名(14.6%)であった。

父母の職業とその組み合わせを表1に示す。父母共に被雇用のものが195世帯(60.7%)、父母共に自営業のものが52世帯(16.2%)、いずれかが自営で、いずれかが被雇用のものが18世帯(5.6%)であった。

2. 休園の目安

親が休園の目安としている症状は、発熱が最も多く311名、ついで下痢73名、嘔吐66名、腹痛66名、咳31名などであった。なお親が発熱とみなす体温は37.5℃～38.5℃が多かった。

3. 子供の病気時の対応

子供が病気で休園する時の対応では、自宅で看護するものが237名(73.8%)と最も多く、自宅・保育園以外の所に預けるものは、46名(14.3%)であった。

1 長崎大学医療技術短期大学部看護学科

2 長崎大学医療技術短期大学部一般教育

3 福岡市立こども病院

4 北里大学病院

5 長崎大学医学部附属病院

6 西諫早病院

表1. 父母の職業形態

父 \ 母	自 営	被雇用	その他	不 在	無回答	計
自 営	52 (16.2%)	14 (4.4%)	2 (0.6%)	0	0	68
被雇用	4 (1.2%)	195 (60.7%)	10 (3.1%)	1 (0.3%)	3 (0.9%)	213
その他	0	1 (0.3%)	0	0	0	1
不 在	2 (0.6%)	30 (9.3%)	2 (0.6%)	0	2 (0.6%)	36
無回答	0	0	0	0	3 (0.9%)	3
計	58	240	14	1	8	321

また子供を休園させたとき、誰が看護するかについての回答を表2に示す。自宅で看護すると答えたものでは、母親が仕事を休むものが237名中162名と圧倒的に多かった。自宅・保育園以外の所で看護すると答えたものは、ほとんどが親戚に預けていた。

表2. 子供の病気時の対応
— 自宅で看護する場合 —

N=237

母が仕事を休む	162
同居家族がみる	19
子供をみながら仕事をする (自営)	8
親戚に来てもらう	4
父が仕事を休む	2
子供だけ残す	1
その他	40
無回答	1

両親の職業と子供の病気時の対応との関係を表3に示す。両親の職業の組み合わせでは、両親が共に被雇用の場合は、自宅で看護すると答えたものは195名中130名(66.7%)であったが、父母のいずれかまたは両方が自営の場合、自宅で看護すると答えたものは70名中61名(87.1%)を占めていた。両親が共に被雇用の場合、自宅で看護すると答えたものが有意に少なかった(P<0.01)。

子供の病気時の最も理想的な対応については、自分が仕事を休み家で看護したいと答えたものが295名(91.9%)と圧倒的に多かった。

4. 病児保育に対する意見

病児デイケアパイロット事業をふまえ、病児保育の望ましいあり方について自由記載で意見を求めた。そのうち回答のあった250名に関してその内容をまとめた。

病気の時ぐらい親が看るべきであるとする意見が102件、病児保育の推進よりも職場・社会の環境改善を望むものが33件、通園している保育園・職場での病児保育を望むものが16件であった。また病児保育施設に対しての要望として、医師・看護婦などの専門家の常駐を望むものが16件、病児保育施設と保育園とのコミュニケーションを望むものが8件あった。病児保育施設に対する不安では、他の病児からの感染を心配するものが15件、利用する際の経済的負担への不安を訴えるものが7件であった。

なお病児デイケアパイロット事業に賛成するものは192件であった。

IV. 考 察

私たちの今回の調査では、休園の目安として発熱、嘔吐等の急性期の症状が多かった。帆足ら²⁾が行った病児保育の実態調査では、病児保育施設が受け入れる病状は発熱などの急性期は少なく37.7%、回復率が62.3%であった。その背景には施設側で病期・病状を規定していること、また保護者側にも急性期ぐらいは自分がみたいと仕事を休む親が多いことなどが推察される。長崎県では「病児保育」を標榜している施設が少ないため、子供がこのような症状の時には親が休んで自宅で看護するか、いつも通っている保育園以外の所で看護してもらうかの2通りの選択しかない。実際にはほとんどの親が自宅で看

表3. 両親の職業と子供の病気時の対応

	自宅で看護する	自宅・保育所 以外の所に預ける	時と場合による	計
父母ともに被雇用 (N=195)	130(66.7%)	35(17.9%)	30(15.4%)	195
父母のいずれか または両方が自営 (N=70)	60(87.1%)	6(8.6%)	3(4.3%)	70
計	191	41	33	265

P<0.01

病児保育の実態調査

護していた。その場合、父親より母親のほうが仕事を休んで看護することが圧倒的に多かった。上家³⁾の報告でも、子供の病気のために親が仕事を休んだ日数をみると、1年間に20日以上休んだ母親は20%に上り、まったく休まなかった母親は11%である一方、20日以上休んだ父親は0.4%、まったく休まなかった父親は38%であったとしている。このことは、子供の病気時には母親の方が仕事面において影響を受けやすいことを示している。

「子供が病気の時くらい親が看るべき」という意見が圧倒的に多かった一方で、病児デイケア事業に賛成するものも半数以上みられた。育児支援の選択肢のひとつとして病児保育の整備を図りながら、さらに高島⁴⁾が「働く女性の就労と保育調査」の中で述べているように、育児休業中の所得保障、1日の労働時間の短縮、職場の同僚の理解など労働条件・労働環境の面での改善も望まれる。

本論文の要旨は第7回長崎県母性衛生学会および第41回小児保健学会（水戸）で発表した。

文 献

1. 安 典子：保育要求の多様化と特別保育，別冊発達，14:194-200, 1993.
2. 帆足英一，保坂智子，庄司順一，恒次鉄也，大坂多恵子，帆足暁子，岩久富子，奥山真紀子：病児保育室の実態調査（その4），第40回日本小児保健学会集録集，518-519, 1993.
3. 上家和田子：病児デイケアについて，母子保健，413:2-3, 1993.
4. 高島順子：働く母親への子育て支援のあり方，周産期医学，23:841-845, 1993.